

2007年度

人権作品集



(「人権」に関するポスター応募作品 小学生の部 6年生)



(「人権」に関するポスター応募作品 中学生の部 3年生)

は じ め に

名張市・名張市教育委員会では、日常の家庭生活、学校生活、社会生活などの中からの体験を通して、人権を守ることの重要性や、部落差別をはじめ、あらゆる差別をなくすための意見を市民のみなさんから募集しています。

本年度も、小・中学校の児童生徒をはじめ、高校生のみなさんから、「人権」に関する作文・標語・ポスター（図画）を合わせて四三五点もの応募をいただきました。

全体を通して見てみると、自分たちの身近な問題や、さまざまな体験を通して、人権の大切さをとらえ、自分たちの生活の中で差別をなくしていく行動に移していこうとする気持ちが現れています。日ごろの学校、地域等での人権・同和教育の取り組みの成果だと喜んでいきます。

この作品集には、応募いただいた作品の中から、作文二一点、標語一五点を掲載しました。

作文・標語は、様々な学習や日ごろの自分自身の体験を通して、差別の現実に触れ、その中から差別をなくすために、自分の問題として自分がどう行動すべきかなどが率直に表現されているものが多く見られました。

なお、ポスター（図画）については、二作品を啓発用のポスターとして活用します。

この作品集を通して、人権について考えていただいたり、差別に対する見方や考え方などを知っていただくとともに、さまざまな学習の場でご活用いただき、人権意識の高揚と人権・同和教育の一日も早い解決に向けて、一層ご尽力いただきますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、作文・標語・ポスター（図画）にご協力をいただきました皆様方に対し、厚くお礼申し上げます。

目次

作文

小学生の部

わらって あそびたい	(一年生)	4
友だち	(二年生)	5
わたしについて	(四年生)	6
弟のこと	(四年生)	7
心の鏡	(五年生)	8
自分をふり返って	(五年生)	9
いじめはやめよう	(五年生)	10
車いすのプロテニスプレイヤー	(六年生)	11
『国枝慎吾』 そして・・・	(六年生)	11



中学生の部

やさしさにかえて

(二年生)

12

「部落問題」について

(二年生)

14

高校生の部

つばさ学園に行って

(一年生)

15

標語

小学生の部

17

中学生の部

17

今年度人権作品応募状況

18

わらって あそびたい

(小学一年生)

わたしは、ひるやすみにともだちとあそぶやくそくをしました。ひるやすみにわたしがそとにできると、その子がはしってきました。そして、

「なあなあ、ぶらんこであそばへん。」

といました。でも、わたしはたいやにのつてあそびたかったので、

「いやだ、ぜったいたいやほくじょうがいい。」

といて、たいやほくじょうにひつぱっていきました。ともだちは、すこくいやなおをしていました。

「きょうはならいことやから、おむかえにきてもらうひなん。」

「こんど、あんちゃんのにえにまたあそびにのつていい。」

ともだちはあそんでいるとき、いつもげんきなこえではなしかけてきます。でもそのひは、なにもはなしかけてきませんでした。二人でだまつてたいやのうえにのつていました。わたしはきになって、ときどきともだちのほうをみながらたいやをまわしていました。でもともだちは、とおくであそんでいる人のほうばかりみて、わたしのほうはみてくれません。あそんでいるあいだ、ともだちは1かいもわらいませんでした。ちやいむがなると、なきそつななおをしてかえっていきました。

そうじのじかんになってわたしは、「おこつてないかなあ。」と、そんなことばかりかんがえていました。けれど、かおをみて「ごめん。」というのがはずかしくていえませんでした。

でもわたしは、まえにこんなことがあったことをおもいだしました。はるに、かるちゃあばあくにいったとき、いとこが、

「たいやのぶらんこであそぼつ。」

といて、さきにはしっていつてしまいました。わたしはすべりだいであそびたかったので、ちよつといやなきもちになりました。けれど、ちがうことをしてあそびたいというのはわるいとおもって、「すべりだいがしたい。」といわないで、うしろからおいかけていきました。いとこはじぶんでたいやをぶらぶらこいでわらつていました。でもわたしは、「はやくかえりたいなあ。」とさいごまでおもっていました。きもちはどうもぐらくらくなつていきました。ともだちも、きつとそんなきもちだったときづきました。わたしはわるいことをしたなあとおもい、つぎのひにあやまることにしました。

きょうしつにいくと、ともだちはえをかいていました。こつちをむいてめがあつたとき、わたしはどきつとしました。ゆるしてくれなかつたらどうしようとおもったからです。ときどきしたけれど、かおをみて、

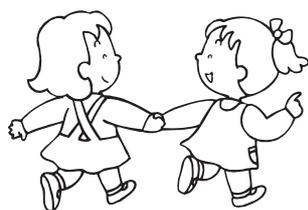
「ごめん。」

といました。ともだちはこつとして

「いいよ。」

といてくれました。わたしはほつとしました。

これからは、じぶんのきもちだけでなく、ともだちのやりたいこと、もきちんときかないといけないなあとおもいました。これからは、ともだちとわらつてあそびたいとおもいます。



友だち

(小学二年生)

「学きのどうとくの時間に」あの子」という話をべんきょうしました。それは、「あの子といっしょにいたらあかんぞ。」という話が一からおおぜいの人になつていって、一人の子が、

「それってほんまにほんまの？」と言ったことから、みんながあの子と話をしてみようと思いつくお話をした。

ぼくは、あの子がかわいそうだと思います。さいごにみんなであの子と話をしてみよとぎめたのは、とてもいい考えです。そうすればみんながよしになるかもしれないし、いっしょにあそんで友だちになれると思いました。そして、なぜあそばないほうがいいでという話になったのかと、はじめて気づく子もいると思います。

ぼくはこのべんきょうをして、友だちはたいせつだなとかんじました。そして、「それってほんまにほんまの。」と言った子は、友だちの気持ちをよく考えているんだなと思いました。

ぼくがそこにいたら、
「そのつわさ、つぎの人に知らせたらあかん。ためしにあの子と話をしてみたらいいやん。それでよかつたらいっしょにあそべばいいやん。」と言います。

ぼくの友だちの中には、教室での話し合いのときに、「うわさがひるがったら、あの子の友だちがいなくなるよ。みんな友だちやんか。一人だけなかまはずしたらあかんやんか。」と言った人がいました。ぼくは、その考えにさんせいです。もし、こんなことがおこつたら、ぼくは、友だちといっしょにうわさをひろめている人にはつきりとぼくたちの考えを言いたいです。

なにかあったときに、友だちにたすけてもらったら、とてもうれし

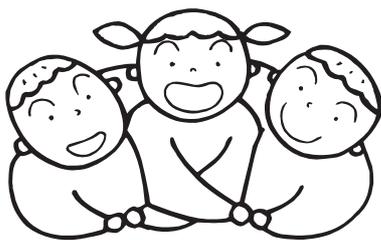
い気もちになります。ずっとまえ、休み時間にあそんでいたとき、ぼくは高学年の人にあそびばしよのことで、つよくちゅういされました。すごくこわかったです。そのときに、クラスの子が「そんなにきつく言わんといたりよ。」って高学年の人に言つてぼくをたすけてくれました。すごくうれしかったので、その日のかえりの会でその子にありがとを言いました。

うんていからおちたときは、まわりにいた友だちが「だいじょうぶ。」とか「ほけん室に行こう。」とか言つてくれてすごくうれしかったです。

ぼくも、友だちがいじめられているときに、「いじめやんとき、じぶんもやられたらいややる。」とちゅういできたことがあります。

友だちにやさしくしたりされたりすると、学校にくるのがとても楽しくなります。友だちはたいせつです。

これからもぼくは、友だちがこまっていたらできるだけその子の気持ちを考えて、声をかけていける人になりたいと思っています。



わたしについて

(小学四年生)

わたしは、フィリピンで生まれました。フィリピンには、六才までいました。フィリピンでは、大雨がふると、洪水になって、家のまわりがプールみたいになりました。家の半分まで、水が来ました。水はきたなかつたけど、

わたしは

「プールやあ。」

と、泳いでいました。魚もいて、小魚といっしょに泳ぎました。泳ぎながら、魚をつかまえることもできて、とつても楽しかったです。

六才で、日本に来ました。一年生のときは、教室でなにもしゃべりませんでした。日本語がぜんぜんわからなかつたからです。みんながなにを言っているかも、わかりませんでした。そうじの時間、お姉ちゃんがいいたので、

「なにをするのか」

「そうきんでふくのは、どこか」
を、教えてもらって、やっとできたのを覚えています。となりの席のあやかちゃんがいる話しかけてくれたこともあったけど、言っていることがわからなかつたので、無視したこともあります。今思うと、悪いことをしたなあ、と思います。

食事になると、はしの持ち方で、お父さんにおこられて、泣いたことも、しよつちゅうありました。今は、とてもおしゃべりなわたしだし、はしの持ち方もバッチリです。それでも時々、みんなの言っていることがわからないことがあります。

お母さんとは、フィリピン語や日本語で話します。お母さんは、いつも仕事ばかりしています。夜おそくなるまで帰ってきません。お父さんといっしょに帰ってきて、

「せなかがいたい。」

と、よく言っています。お母さんは、フィリピンでも働いてばかりい

たし、日本でもそうです。(むつちやつかれてるなあ。こんなに仕事がしんどいねんなあ。)と、思つて、マツサージしてあげるときもあります。お母さんは、わたしが勉強をがんばっていることが、うれしいとじまんしています。お母さんが喜んでくれることが、わたしもうれしいです。

わたしは、自分がフィリピン人なのか、日本人なのか、わかりません。でも、どつちでもあると思います。クラスで、

「フィリピン人」

と、言われたことがあります。そのときは、とてもいやな気持ちになりました。それは、悪口のように、フィリピンのことを言われたような気がしたからです。今は、言われないから、わかつてくれたのならうれしいです。

お母さんは、

「食べものもいっぱいあるから、日本のほうが、いい。」

と、言います。でも、わたしは、フィリピンのほうがいいなあと思うことがあります。

フィリピンのいいところの一つ目は、いつもまわりに人がいっぱいいることです。日本では、ひとりであることが、たくさんあります。さみしいとき、フィリピンのことを思い出します。

フィリピンのいいところの二つ目は、友だちのことです。フィリピンでは、そばにいたらもう友だちです。近くにいる子みんな遊びます。でも、日本では、友だちにならないと遊べないことがしんどいです。

わたしは、フィリピンも日本も好きです。

「両方のことを知っているのは、大きなざいさんや。すごいことやで。」と、先生も言います。両方の言葉や、両方のいいところを知っていることが、今は、どうしてざいさんなのか、わからないけど、わたしにしかできないことが、あるかもしれせん。それをみんなにも伝えていけたらいいなあ、と思います。お母さんとも、いろいろな話をたくさんしたいなあ、と思つています。

弟のこと

(小学四年生)

ぼくの弟は、一年生です。うまれつきのハンディキャップがあります。はっきりわからないけれど、みんなよりゆっくり成長するということはたしかです。

一学期、弟が入学して一ヶ月くらいたったころ、こんなことがありました。

お母さんと弟がいつものようにいっしょに歩いて帰っていると、AさんBさんCさんDさんが弟のまねをしてきたのです。弟が

「ま」。

と言うとAさんたちも

「ま」。

とさげんできたそうです。ぼくは、家に帰ってその事をお母さんから聞きました。ぼくはなんだかとてもはらがたちました。

つぎの日、ぼくは、弟のことをわかってもらいたくて、弟のまねをした一人の子に

「まねしやんというて。」

と言いました。そしたら、その子は

「べつにいいやん。」

と言ってきました。ぼくは、ほんとうにはらが立ったので

「おい、おまえなぐつたるか。」

と言ってしまいました。

「なぐつてみる。」

と言われたので、心の中でなぐりました。でもおさえきれなくてほんとうになぐつてしまいました。なぐり合いになったところを先生に止められました。

それから、Aさんたちは、弟のまねをしなくなりました。とてもうれしかったです。

ぼくは弟が、一年生に入学してくる前は、

「弟のことを学校みんなは、わかってくれるかなあ。」とちょっと心配していました。弟は、うれしいときや何か言いたいときなど、その人をたたいてしまうことがあるからです。

でもそんな心配は、しばらくしてふつとんでしまいました。なぜかというと、高学年の子も、ぼくの友だちも、弟のことを考えてくれて弟がたたくのは、弟がなぐつてほしいからだとかわかってきているからです。この前もぼくのわすれた水とうを弟が教室まで持ってきたときぼくは外で遊んでいたのですが、クラスみんながぼくの席を教えてくれていました。ぼくは弟が何だか人気者のような気がしました。

家で、ぼくと弟は、ゲームをしたり、ふざけあったり、つくえのまわりを回って追いかけてっこをしたりしてよく遊びます。弟はぼくになぐつてもらうことをとても喜びます。

学校にいと、弟のことをわすれているぼくだけど、家に帰って弟の顔を見ると、大切な家族なんだと感じるときがあります。

今、弟は給食や食事を、スプーンやフォークをつかってうまく食べる練習をしています。ぼくも弟に負けないように、いろいろな事をがんばっていききたいです。



心の鏡

(小学五年生)

私は人権という言葉を使う前に自分は今までどういう生き方をしてきたのか、自分の心の鏡と向き合ってみることが大切なんじゃないかと思いました。

私はずっと、こうかいていることがあります。それは、休み時間に一人で泣いている子を見かけた時、声をかけてあげられなかった事です。忙しかったし、その時は思ってたけど、多分、めんどくさいし、思っっちゃた部分もあったと思います。そんなことを思った自分がとても憎いです。

その反対にいやがらせされて泣きそうになった事もあります。それは、ふだん仲良くしていたはずの友達との間のふんいきが悪いと思いはじめた数日後、自分が一番気にしている天然パーマのことを悪口にして手紙に書かれてあったのです。とってもいやでした。

私はふだんから優しいねってよく言われます。でも、本当に心のそこから優しさをもっているのだろうか、一人ぼっちの子にちゃんと声をかけてあげられる優しい心をもっているか。そんな、今まで考えもしなかった事に最近気付きました。

こんな事を考え、思えるようになったのは一枚のポスターが始めました。そのポスターとの出会いは授業中の事でした。人権ポスターの参考に担任の先生がもってきてくれたものでした。

そのポスターに書かれていた言葉。それは「私が変わる、私が変わる」というとっても素晴らしい言葉だったのです。

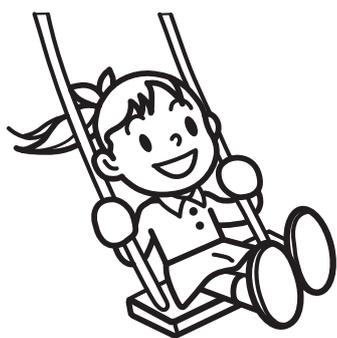
本当に優しいということは、その人のことを本当に大切に思うことだと思います。私はほんの少しの心がけで身近な人をもっと大切に

たいです。そして「私が変わる」をクリアしたいです。そして私を変えをクリアしていくのです。

二つの事からクリアするのは、かんたんではないかもしれませんが、人間というのはなまいきになったり、人の悪口を言ったり悪い態度をとってしまったたりすることが多い。なのに、自分が出来てないことをえらそうに注意したりする。そんなことがあるから、心の鏡と向き合わなければ、ならないと思うのです。

世界平和って願う前にまず、身の周りのクラスの中を平和にしたい。なぜなら世界は小さな社会の集まりだからです。

私は、まわりの友達が好きです。家族も先生も親せきの人も近所の人も、みんな大切です。私は、まだ会ったことのないたくさんの人にも支えられています。今、私が使っている物も私が使いやすいように一生けん命作ってくれた人に支えてもらっているのです。どの人も幸せでいてほしい。そのために、私自身が努力していきたいです。



自分をふり返って

(小学五年生)

わたしの思い出の中で、一番後かいていることは、仲のよかった友達のために、何も出来なかったことです。それは、一年生のころのことでした。いつも通りピロティで遊んでいたのですが、そこに、高学年の人が三、四人やってきて、

「そこじゃま。めいわく。はやくよけて。」

といきなり言って、友達にわざとあたって、走って行きました。友達は、あいにくけがはしなかったものの、泣いていました。その高学年の子に、何も言い返せなかった自分が情けなくて、ずっと、後かいています。

くいの残ったまま、二年、三年、四年、そして五年生になりました。今思うと、本当情けなく、くやしいです。その人達は、友達の遊ぶ権利をうばったんだと思います。

「今、友達にわざとあたった人は、どついう人になっているんだろう。」
気になってしかたありません。思い出すたびに、自分をせめてしまします。友達は、

「もう大丈夫。こわくないから。大丈夫。」

と言っていますが、今でも六年生の人が横を通ったらふるえたりしています。とても不安でいっぱいなのだと思います。わたしも、今だに、高学年の人に注意はできません。あのと

「情けなかった自分」

そして、

「今も、全然変わってない自分」

もうくやしくてくやしくて、でも、一年生のころにはもどれない。

そのくやしくてくやしい時に山端さんに会いました。山端さんが

「差別している人に、注意できないときもある。でも負けてしまっても、前に進もう。」

と言ってくれたので、とても心がおちつき、いやされました。自分の心は山端の一言で強くなれました。もう一度山端さんに会って、

「ありがとう。とてもおちついた気持ちになりました。なやんでいた時だったので、心がおちつき、いやされました。本当にありがとう。ございました。」

と言いたいです。

今、わたしは、これからどんなことをしたら注意できるようになれるか、ということを考えています。考えても考えても「答え」は、なかなか見つけれません。「勇気を出す」それとも「ちゃんと考える」それが答えかな、考えたこと全部が「答え」かもしれせん。

そこに、助けてくれる「仲間」というとても大事な友達がいるからこそがんばれるんだな。とても大切なことだな。心からそう思いました。仲間がいるのって大切な事なんだと改めて分かりました。山端さんに会えてよかったです。わたしみたいにもやもやとした心を持った子に、心をいやしてあげられるような、山端さんみたいな人になりたいです。



いじめはやめよう

(小学五年生)

私が三年生の時に、一人の男の子にいじめられていました。その時一人の女の子が、

「やめや。」と言ってくれました。だから私は、ひどくいじめられずになりました。私はそのあとに、

「ありがとう。」と言いました。そうしたら、女の子が、「いいよ。それより、だいたいようぶ。」と言ってくれて、うれしかったです。

次の日、私が友だちと学校に来ていると、昨日たすけてくれた女の子が、同じ男の子にいじめられていました。私はそれを見て、

「やめや。」といいかけたんだけどその男の子がこわくていいだせませんでした。私はとおりすぎてしまいました。

かえり道、私はずっとその女の子のことを思ってたかえっていました。私は、自分ではんせいをしていました。女の子だいたいようぶかなと思っ

ていました。次の日また女の子がいじめられていました。私は今日こそいわなくちゃと思いました。私はおもいきって、

「やめときや。」と言いました。そしたら男の子が、にげていきました。私は、女の子に

「だいたいようぶ。」と言っただけで、

「ありがとう。」と言ってくれました。この時に、私もうれしかったし、女の子もうれしかったと思います。

かえり道、私は男の子のことについていっばいでした。なぜなら、

「またいじめられる。」と思ったからです。とちゆうで、今日いじめられていた女の子がきて、

「男の子のことを考えてるの。」と言っかけて私は、

「またいじめられるよ。」と言ったら、女の子が、

「だいたいようぶ、私がかまってあげるよ。」と言ってくれました。私は、

「ありがとう。」と言いました。家で、

「あの女の子は、やさしくしてくれるんだ。」と思いました。次の日、女の子と学校にいつていると、男の子が私たちをまっていたように、げんかんにたっていました。私は、

「またいじめられる。」思っている、男の子が、

「いじめてごめん。」と言ってくれました。その時に、私は一番うれしかったです。いじめのわいことが分かって、自分からあやまってくれたからです。学校ではそのあとにもいじめについて学習しました。

その男の子もそれからは、いじめをしなくなりました。学校が少し明るくなった気がしました。やっぱりいじめはやってはいけないんだなと思いました。だからいじめをゆるさない仲間をふやしていくことが大切なんだなと思いました。



車いすのプロテニスプレーヤー

『国枝慎吾』　そして・・・

(小学六年生)

国枝慎吾さんのビデオを見て、「すごいなあ。どうやってんねんやる。」と思いました。ふつつのテニスよりもむずかしそうに思いました。練習も二倍か三倍、それ以上にがんばっているのだらうなと思いました。それに、二十三歳で世界大会で優勝するなんて、めっちゃすごい！

車いすのテニスとふつつのテニスでは、車いすの方が迫力があつてすごいです。国枝さんは、あんまりできない技をふつつにこなしていつて、「わあ、どうやってんねんやる。何か月かかってきたんやる？」と不思議なことばかりでした。

私の友だちにも車いすで生活をしているA君がいます。私はA君と二年生から六年生まで同じクラスです。二年生ではじめて同じクラスになったとき、「足動かせへんの？なんなんそのへんな物。」と思っていました。私が「へんな物」と思ったのは、実は車いすでした。そのころは、車いすのことを知らなくて、「だっせ」とか悪口を言ってしまうていました。今思えば、それはA君にとつて命の次に大切なものだと思うので、ひどいことを言ってしまったなあと思います。

三年生になって、私の担任だった先生が、その子(A君)のことを話してくれました。でも、小さかったのであまり理解できませんでした。それから一年たち、四年生になって、たんぼぼ学級(特別支援学級)の先生がA君のことについて話をしてくれて、やっと理解できました。「A君は、赤ちゃんのときから脳に水がたまるので、手術をして頭にシャントというくだを入れていきます。だから体中に信号を送るのが遅いこともあつて、歩くことが難しいし、他にも苦手なことがあるので、

みんなを手助けして下さい。」と言われました。

それから私は、車いすを押ししたり階段を上がる手助けをしたりするようになりました。

そして六年生になりました。A君もがんばつて運動会の練習などをやっています。友だちに板を並べてもらつて、板の上を歩行器でゆっくり歩いていきます。ずっと「ゴ」ルをめざして、前をしつかりみつめていました。私は、足を動かすのが大変でも、ずっと真剣に最後まで歩いているA君を見て、心でぬかされているような気がしました。小学校最後の運動会をいっしょにできてうれしかったけど、ちよつとさびしい気持ちになりました。いつかA君とべつべつの道になるかもしれないからです。でも、いっしょにすごした六年間はわすれません。

そして、これから出会う障害がある人にも、自分でがんばろうとしていたら見守るけど、「助けて」という顔をしていたら手助けしたいと思います。A君と出会つて、他の人にも手助けできる勇気が出てきました。



やさしさにかえて

(中学二年生)

私には、とても辛い思い出があります。六年生の春、埼玉県の小学校へ転校しました。そこで、悲しい経験をしました。

「また友達をつくろう。どんな友達がいるのかな。」そんな不安でいっぱい私の心を、三人の友達が消していつてくれました。毎日いっしょに帰っていた時は、とてもうれしかったです。でも、ある日から、私に対して冷たくなったのです。「用事があるの。五分くらいしても来なかつたら帰ってもいいよ。」そう言われました。私は、げた箱の所で独りで待っていました。すると「まだいる。」小さな声で友達の声が聞こえました。顔を上げると、私の大好きな友達でした。急いで柱に隠れたあの姿は、今も私の心から消えることはありません。「教室に忘れ物をしたから先に帰って。」「寄りたい所があるから先に帰って。」など何かと理由をつけて、いっしょに帰ってくれなくなりました。おとなしくて引つ込み思案な私も悪いのもしれません。でも、悲しくてたまりませんでした。泣きたい気持ちを一生懸命我慢して、毎日独りぼつちで家に帰りました。家に着くと、今まで我慢していた気持ちがプツンと切れて、涙があふれて止まりませんでした。そんな私をいつも慰めてくれたのは、飼っている犬の「シヨルト」でした。かわいいしっぽを振って、私の手を何度もなめて慰めてくれました。「シヨルト」が唯一の私の心の慰めでした。そんな毎日が一か月ほど続きました。

ある日、「自分の訴えたいことを作文にする」という授業がありました。私は、今までのことを正直に書きました。すると、先生が相談にのって下さいました。先生のおかげで元通りの仲良しになることができました。悲しかった気持ちが、うれしい気持ちに変わっていきま

した。でも、二年間しかいっしょにいられませんでした。

私は、今年の春、三重県に転校して来ました。新しい友達は、私に優しくしてくれました。教室や学校の中まで案内してくれた友達もいました。本当にうれしく思いました。

私の心の中には悲しい思い出も残っているけれど、「いじめ」や「差別」について深く考えるようになりまし。相手も自分も同じ人間です。うれしいことはうれしいし、悲しいことは悲しいのです。一人一人が相手を思いやる心を持てたら「いじめ」や「差別」は生まれてこないと思います。

私は、見えるものだけを見るのではなく、見えない人の心も見える人になりたいと思っています。そのためにはどうしたらいいか考えました。相手の立場に立って考えたいと思います。けれど、自分に経験がないと、本当に心の中を理解することは出来ないと思います。だから、私は色々なことを経験したいです。小さな怪我也大切です。怪我をした人の気持ちが分からないからです。そうしたら「大丈夫。」の言葉だけではなく「痛かったでしょ。」と、相手の立場や思いに立った優しい言葉をかけることができます。重い荷物を持って苦しい思いをすることも大切です。苦しい気持ちが理解出来るからです。そうしたら「ありがとう。」の言葉だけではなく「重かったでしょ。」とか「半分持ちましようか。」と、相手を思いやる優しい言葉をかけることが出来ます。暑い中、長い道のりを汗をかいて自転車を通うことも大切です。暑い中、歩いている人、働いている人の気持ちが分かるからです。そうしたら、冷たい飲み物を出してあげる優しい心が生まれます。「暑かったでしょ。」と、相手の立場に立った言葉もかけることが出来ます。庭の草をぬいたり、土をいじったり、溝の掃除をしたり、汚れることをすることも大切です。黒く汚れた手を見て「汚ない手だなあ。」と思うのではなく「畑仕事してるの?」「何かお手伝い

しましようか。」と、見えない姿が見えるようになり、優しい言葉がかけられる人になれると思います。

うれしい経験、悲しい経験、苦しい経験、一つ一つの経験に無だなもの一つもないと思います。経験は、人の心を理解する優しい心に変わっていきます。私の辛い経験は、あの時一回きりだったけれど、辛くて悲しかった思いを何倍もの優しさに変えて、もっと人を思いやれる人になりたいです。



「部落問題」について

(中学二年生)

私は去年、ヒューマンライツに参加して、市内の他の中学校の人達と人権の事について話し合いました。いじめやいじめのせいでの自殺についてなど、様々な事を話し合いましたが、その中で私が一番印象に残ったのは、「部落問題」についてでした。家に帰り、その事を母に話すと、母はしばらく何かを考えてから静かに話し始めました。いつもと違う母のその真剣な表情に私もいいかげんな気持ちで聞いてはいけないうちと思いました。話は、母の一番の親友であるAさんの事についてでした。母とAさんは、小さい頃、何をしてもいつも一緒に、周囲からは姉妹のようだねと言われるほど仲が良かったそうです。二十数年前、Aさんは結婚を考えている男性がいたそうです。しかし、いわゆる部落と言われる地域に住んでいるというただそれだけの理由で相手の両親や親族に結婚を大反対され、Aさんにとつては、まるで自分自身の人格や存在そのものまでもが否定されたかのように、とてもつらい思いをしたそうです。Aさんから事情を聞いた私の母は、本当のAさんの事を何も知らないくせにと自分の事のようにくやくしてく、行き場のないいきどおりを感じた事を、Aさんの悲しい顔と共に今でも昨日の事のように覚えているそうです。Aさんと彼の意思は強く、いろいろな困難を乗り越えて結婚に至りましたが、双方の親族の溝は深く、新郎側と新婦側とそれぞれ日時、場所を変えて二回結婚式を行っていたそうです。Aさんは今幸せに暮らしているそうですが、あの時の心の傷が完全にいえる事はないと思います。私は、Aさんに会った事はありませんが、母が読んで聞かせてくれるAさんからの手紙から、Aさんは明るく、賢くて、周りの人や物に対し、思いやりあふれる優しい人なのだろうなという印象を受けました。いつしか私もAさんの

事を身近に感じ、好きになっていました。そんなAさんにそのようなとてもつらい過去があったなんてショックでした。私も母と同じように怒りに似た感情を覚えました。そして、改めてもう一度、「部落問題」について考えなくてはならないと思いました。

そもそもなぜ部落差別は二十一世紀の今もお根強く残っているのでしょうか。そして、どうすれば部落差別をなくす事が出来るのでしょうか。部落差別が消えない原因の一つに、親から子どもへ、子どもからそのまた子どもへと勝手な間違った部落への思いこみが伝えられている事にあると思います。私達の世代が部落への偏見、差別心、そして、それらを後世へ伝えるリレ」をストップさせるべきだと思います。私達にならそれが出来ると思います。なぜなら私達は、小学校の時からずっと人権について学び、考え、そしてそれらを生かしていかなければならぬからです。仮に誰かに「ここは部落だよ」と教えられたとしても私はきつとこう言うでしょう。「それが何?どこに住んでいるように皆同じ人間じゃない。」と。だから、これからは、たくさんの人達との出会いを通して、部落差別の事についてさらに知り、理解して今後の人権学習などで今まで以上に積極的に意見を発表していきたいと思えます。



つばさ学園に行つて

(高校一年生)

七月十四日、吹奏楽部員の私は、伊賀つばさ学園に行きました。つばさ学園の人たちと交流をするためです。私はこれまで、つばさ学園について何も知りませんでした。イメ「ジ」ジとして病院のようにベッドが並んでいて、静かなところなんだろうと、なんとなく思っていました。つばさ学園はこの四月から、障害児学校から特別支援学校に名前が変わったと聞きましたが、私の心の中のイメ「ジ」は何も変わりませんでした。

つばさ学園に向かうバスの中で去年、一昨年と参加した二、三年生の先輩方は「楽しい演奏会やで」と教えてくれ、楽しみにしているようでしたが、私たち一年生は、つばさ学園のことも知らないし、どんな演奏会になるのだろうと不安な気持ちでいました。顧問の先生も「つばさ学園のみんなもとても楽しみにしてくれています」とおっしゃっていました。半信半疑でした。「わけの分からないことを話しかけられたらどうしよう」とも思いましたし、「コンク」ル前の大切な時間を割くことも不満でした。

バスがつばさ学園に着くと、とても厳しい夏の日差しの中、生徒さんたちと先生方が私たちを待っていてくれました。ニコニコして「こんにちは！」と大きな声でむかえてくれました。私の不安は吹き飛び、先輩や先生が言っていたことは本当だったんだと嬉しくなりました。

つばさ学園の人たちは楽器を運んだり、いすを並べたりする準備も手伝ってくれました。初めての演奏会でとまどっている一年生よりも、てきぱきと動いてくれて助かりました。会場で待っている人は窓からこちらの様子をのぞいたり、ドアを開けて先生に止められたりして、「早く演奏を聞きたい」という気持ちが伝わってきました。

普通、演奏会は演奏を静かに聞いて楽しむものです。が、つばさ学園はそうではありません。演奏する前から、これから始まる事への期待を体じゅうで表し、演奏中も私たちの音楽を全身で聴いてくれました。会場を走りまわっている人もいましたが、それは退屈だからそうしているのではなく、音楽が楽しくて楽しくて仕方がないからのようなのでした。

間近に迫っているコンク「ル」では、審査員に審査してもらうために演奏をします。そして「音楽が合っていない」「メロデイ」をはつきり」「もっとよく考えて演奏を！」などといった講評をもらい、それに一喜一憂するのです。

でも、この演奏会は違います。ちょっと音程が合っていない、テンポも不安定な私たちの演奏を心から楽しんでくれるのです。そして、その楽しんでくれる様子を見て、私たちも嬉しくなれるのです。

「となりのトトロ」の「さんぽ」という曲では演奏がかき消されるぐらい大きな声で歌ってくれました。車いすの人も大きく体を揺り動かして歌ってくれました。マラカスや太鼓を鳴らしたり、ポンポンを持って踊ったり、経験したことがないような、にぎやかで楽しく活気あふれる演奏会になりました。

私たちの演奏をこんなに喜び、奏者と一緒に楽しんでくれる人たちは他にはなかなかいないでしょう。私は演奏しながら、嬉しくて顔が自然に笑顔になりました。「音楽の力ですごいなあ」とも思いました。

私はこの演奏会で、今までつばさ学園の人たちに対して持っていたイメ「ジ」を大きく変えることができました。ベットが並んでいて暗いというイメ「ジ」を持っていたことが恥ずかしく、申しわけない気持ちになりました。私はこれまでも人權学習をしてきましたが、実際に障害を持った人とふれあったことは少なかったと思います。今回の演

奏会で私は、この人たちともつと仲よくなりたいと思いました。今までの人権学習は「障がい者差別」という社会の問題を勉強してきただけで、一人ひとりの人間を見つめた勉強ではなかった気がします。つばさ学園の一人ひとりの笑顔や歓声、拍手を受けて、「障がい」とは何だろうと改めて考えました。

身近にあるつばさ学園についてさえ、何も知らず、勝手なイメージを持つていた私です。世界には人権に関わる課題がまだまだたくさんあります。蚊帳の外から「大変だなあ」とか「かわいそうだなあ」とか思っているだけでは、勝手なイメージで人権問題を考えてしまうような気がします。

やはり実際にふれあったり、側に立つたりなど、自分のこととして考えていかなければだめだと思います。

この冬にまたつばさ学園との交流会があります。その時は、音楽だけでなく、言葉や表情でコミュニケーションをとってみたいと、今から楽しみにしています。



小学生の部

いじめの火 勇気の水で 消してみよう 五年生

自分から 差別をなくす 行動を 五年生

広げよう 差別をなくす みんなの輪 五年生

ストップ！ 見て見ぬふりを してはだめ 五年生

その言葉 言われた気持ちになってみて 六年生

いじめっ子 見て見ぬふりも いじめっ子 六年生

まちがった ものさし持つては いけないよ 六年生

いじわるは 自分イヤなら 人もイヤ 六年生

その言葉 自分言われて どう思う？ 六年生

「いけない。」とハッキリ言えるのが、本当の友だち 六年生

中学生の部

いつまでも 見ているだけでは かわらない 一年生

見てるだけ それもいじめの 加害者です 一年生

差別は見えない刃物です 二年生

無関心 見て見ぬふりも 差別の一つ 三年生

ひろげよう 差別と闘う 強い意志 三年生

人権作品応募状況

◎作 文

小学校 …………… 六一点
中学校 …………… 一点
高等学校 …………… 一点

◎図画・ポスター

小学校 …………… 一〇六点
中学校 …………… 五四点
高等学校 …………… 三九点

◎標 語

小学校 …………… 一〇一点
中学校 …………… 六一点
高等学校 …………… 一点

作品総数 …………… 四三五点



人権作品集

2008年2月発行

名 張 市
名張市教育委員会